

# アジア・アフリカ ラテンアメリカ

今月の読み物

- 2面、3面 ASEAN からユーラシア
- 4面 わたしと AALA・会員の広場

日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会機関紙

2019年9月1日 No.710



## 核兵器のない世界へ

# 築こう揺るがぬ世論を各国で

## 核兵器禁止条約を25カ国が批准

我々は、被爆75年である2020年を「核兵器のない平和で公正な世界」への歴史的転機とするために、被爆者とともに立ち上がることを呼びかける。一今年の原水爆禁止世界大会国際会議宣言の冒頭の言葉です。来年は広島・長崎の被爆75年、核不拡散条約(NPT)発効50年、2020年NPT再検討会議、そして国連創設75年という節目です。国連1号決議は「原子兵器の廃絶」で、国際政治の原点を想起し、来年を核兵器のない世界への転機とするために、市民社会と各国政府の共同をさらに発展させようと呼びかけるものでした。

米ロの中距離核戦力全廃条約(INF)から米国が離脱、小型の戦術兵器の開発、地上、海中、宇宙空間、サイバー空間まで拡大する核軍拡競争、戦術核兵器の先制使用など、核保有国による逆流が

生じ、一握りの国が全人類の生存を脅かす新たな危険をもたらす恐れも出ています。しかし、核兵器による人類の破滅か、人類による核兵器の廃絶かが問われる時に、核保有国は政治的、倫理的に劣勢になっています。この間のNPT会議で「核兵器全面廃絶を達成する核保有国の明確な約束」「核兵器のない世界を実現・維持するために必要な枠組みの確立」が核保有国を含め合意されたこと、核兵器の使用がいかに壊滅的な結末を示すかについて国際会議が3回開かれ、核兵器のもつ非人道性が一層鮮明となり、核兵器非人道性の告発こそが「核抑止力」論を打ち破る最大の力になることが確認されました。

世界は、核兵器禁止条約へ調印



ロシアのルゲ・ボドロフさん、宗教者平和協議会の森さん、中央が筆者

国70、批准国が着実に増え25カ国になり、発効のための50カ国が見通せる状況となりました。被爆国にふさわしい役割を日本政府に求めることなど運動課題も4本の柱として明確にされました。

- ①「ヒロシマ・ナガサキの被爆者が訴える国際署名」を飛躍させる
- ②ニューヨークで原水爆禁止世界大会、2020年NPT再検討会議での国際共同行動
- ③反戦平和の諸課題の運動との共同
- ④原発、地球環境問題、貧困格差の解消などの課題にとりくむ社会運動との連帯。

(小林立雄 日本 AALA 常任理事)

# ASEAN からユーラシア

## 注目すべき非同盟運動の潮流

タイからアゼルバイジャン—日本 AALA が 2019 年 ASEAN 首脳会議の議長国であり、EAS（東アジアサミット）の議長国でもあるタイを訪れて、国際署名を届け、そして非同盟諸国首脳会議が開催されるアゼルバイジャンに代表を送る、この流れは筆者の目にはとても時宜にかなったものに見えます。

かたや元々は米国のベトナム侵略

の積極的加担国、「絶妙な国際感覚」で米軍基地を撤退させ現在は不戦非核の ASEAN 諸国の要の位置にあり、もう一方は旧ソ連邦の一共和国、現在のイランと米国・イスラエルの対立のなかで重要な地政学的位置にある。二つの国には、第二次世界大戦後の国際環境の激変に結局は非同盟路線に至った共通の経験があるのです。

### ASEAN の「インド太平洋構想」

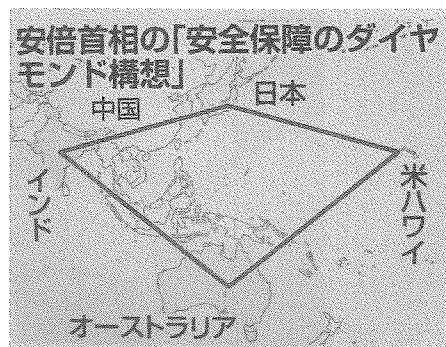
6 月バンコクで開かれた ASEAN 首脳会議は、ASEAN が自律的集団として中心的役割を果たす独自のインド太平洋構想を打ち出しました。これは現段階での新たな自主路線ともいべきものなのです。それは安倍首相が言い始めトランプが乗った「自由で開かれたインド太平洋構想」への実質アンチテーゼの意味をもっています。

米日が唱える「構想」は、米日同盟 + オーストラリアを軸としそれにインドを加え、インド洋と太平洋の広大な地域を米国主導でコントロールしていこうとする軍事戦略性の強いものです。だが「米国一極支配」は過去となり、オーストラリアも中

### 安倍首相の「ダイヤモンド構想」

2007 年訪印した安倍首相はインド国会で「二つの海の交わり」と題して演説、好評を博したと得意満面。が、その直後病気で首相の座を投げ出しました。その 5 年余り後首相に返り

咲くやいな「米日同盟強化」そして「ダイヤモンド構想」（米日印豪の四か国を結ぶ菱形）というインド太平洋の「安全保障」を提唱しました。それ以降モディ首相と計 13 回も首脳会談を



(筆者提供)

行い「戦略的パートナーシップ」強化を図ってきたのです。

2016 年 8 月「自由で開かれたインド太平洋戦略」を発表（のちに軍事色の濃い戦略という名称を構想に変更）しました。アジア再覇権を狙うトランプ政権はこれにのっかり「米日同盟強化」の主戦場とみているのです。米軍はその戦略にそって 2018 年米国太平洋軍をインド太平洋軍に改称、日本の海上自衛隊は 2017 年以来インド太平洋派遣訓練を続けています。南シナ海では米空母「ドナルドレーガン」との共同訓練、インド洋では米日豪仏の共同訓練、インド軍との共同訓練を系統的に行っているのです。まさに「ダイヤモンド構想」の内実は軍事先行、軍事強化のための「自由で開かれたインド太平洋」、まことに血なまぐさい戦略なのです。

トランプは安倍の顔をたててやりながら、イラン攻撃のためのホルムズ海峡作戦用「有志連合」に日本の参加決断を求めてきました。これは安倍首相のダイヤモンド構想の本質的な軍事的進展をトランプは見透かしているのです。ダイヤモンド構想の地図をみれば、一瞬にしてその囲いのなかの ASEAN をはじめとする

宇崎 真

(ジャーナリスト)



ASEAN 首脳会議バンコク 2019 (筆者提供)

国々を従者とみて軽んじる「世界観」が見えてきます。

一方 ASEAN は独自の「インド太平洋構想」を打ち出し、米日同盟の「ダイヤモンド構想」に組み込まない態度を明確にしたのです。6 億を擁する ASEAN10 カ国が他国の力に従うのではなく、自律的集団としてインド太平洋の平和維持と経済発展協力の中心的役割を果たしていくとの宣言はとて小気味よい響きがあります。

ASEAN の独自構想はインドネシアの発案だったそうです。ASEAN

の最大の人口を抱え、多様性の統一を実現してきたインドネシアはバンドン精神を失ってはいないのです。

そして、そのインドネシアの貢献を議長国タイが率直に感謝し賞賛していたのが印象的でした。非核、不戦、外国軍事基地ノー、非同盟、紛争の話し合い解決を憲章にしてまとまる ASEAN が東アジアサミット (ASEAN+ 日中韓 + 印豪ニュージーランド + 米露) を主宰する。その今日の意味あいとその行方は大いに注目していいと思います。

### 非同盟首脳会議議長国 アゼルバイジャン

10 月 25、26 日アゼルバイジャンで第 18 回非同盟首脳会議が開かれます。そこでは現代の複雑で流動的な国際情勢のなかで巧みにバランスをとりながら列強国の支配の危険を減らし隣国との関係を改善しながら非同盟と国の主権を守っていく一大フォーラムとなるでしょう。

非同盟諸国首脳会議の主権国を中南米のベネズエラから今年から三年間引き受けたアゼルバイジャンの進路には多くの問題提起がふくまれています。人口は 1 千万という小国ですが、地政学的位置は重大、ロシア、イラン、トルコ等の隣接大国との国境をもち、石油天然ガスの宝庫カスピ海の沿岸国でもあります。

国内にロシアに後押しされたアルメニアによる占領地域をもち、イスラム教国で、パレスチナ国家を承認、それでいてイスラエルとの関係が深く（兵器購入—石油輸出）イランとも近年良好な関係を築いている。反

とるべき進路を複雑にしているのです。

その小国アゼルバイジャンは 2011 年非同盟諸国に正式加盟、非同盟運動が世界の歴史に登場して丁度 50 周年でした。現在非同盟の全加盟国数は 120（昨年末時点）国連加盟国の三分の二近くに至っています。

議長国を引き受けるにはそれに相応しい実績と確固たる非同盟への確信があるに違いないのです。ここが極めて興味深いところ。傍から見ると、イスラエルやイランとの軍事関係を強化しながら非同盟の旗手たらんとすることに不思議な印象をもつのですが、よく調べていくとなるほどと頷いてしまうのです。イスラエルとの軍事関係はけっして対イランに不利益に使わない。イランとの軍事関係は対イスラエルではない。その軍事はあくまで国内の被占領地への対応にしか用いないという確約を両国が信頼しているのです。

### 非同盟諸国への加盟の条件

非同盟諸国への加盟条件（5 条件 1961 年）は、軍事同盟や外国の軍事基地に関してはどのように明記しているのか改めて読み返してみました。そこには、③多国的（NATO のような—筆者）軍事同盟に不参加④大国との二国間軍事協定を締結し地域防衛条約に参加しても諸大国の対立を深めるものではないこと⑤軍事基地を外国に提供しても諸大国の対立を招くものではないこと（内容意識）とあります。つまり、アゼルバイジャンのケースは現代の

国際環境のなかで、注意深く、柔軟に非同盟運動を展開しているとみられているのです。

「東西冷戦」が終わり、ソ連邦崩壊、ユーゴ解体で非同盟運動はその役割は低下したとも言われましたが、ASEAN の経験、アゼルバイジャンの経験をたどってみると、複雑化した「多極化」時代で結局一番力を発揮していくのは多様化しながら原則を守る非同盟運動なのではないか、そう思えるのです。

## 「会員の広場」を新しく設けます

日本 AALA 機関紙の紙面改善の一つとして「会員の広場」を設けます。昨年6月から「AALA ニュース」をホームページに掲載するとともに配信を希望する方に発信してきました。今回の「会員の広場」は会員の投稿を掲載し、交流することを目的とするものです。各地での AALA のとりくみ、AALA 機関紙を読んだ感想や意見、外国の友人との交流の経験などの投稿を募集します。

原稿は400字以内、毎月10日までに事務局にメールかファックスでお送りください。都道府県名、氏名、電話を明記してください。

## オスパールコーヒーを飲んでひと休みしませんか

暦の上では秋になりました。オスパールコーヒーを飲んで、ひと休みしませんか。おすすめはニカラグアで採れるマラゴジペ(200g、1320円)オスパールブレンド(200g、860円)です。

オスパールコーヒーのギフトセットが  
全15種類からえらべます

3品セット：3,370円  
6品セット：6,290円(箱代が別に必要)



(株) オスパール

Fax：049-254-8158 電話：049-254-6241

わたしと

117



AALA

愛知 AALA 事務局長  
新谷 清美

### 海外勤務での得難い経験から

1977年7月、会社から命ぜられ海外勤務をすることになった。このとき29歳。飛行機も海外も初めて、たった一人でアムステルダムを経由してナイジェリアのカノ(KANO)まで行った。そこから迎える日本人とともにタクシーで半日かけてやっとカドゥナ(KADUNA)に着いた。職場は政府系の会社 Federal Superphosphate

Fertilizer Company limited。食料増産のための過燐酸石灰肥料を生産する工場。電気・計装の Chief Electrical Engineer として勤務。後半は、体調不良で日本に早期帰国した Chief Mechanical Engineer も兼務した。化学肥料工場の運営、プラントの定期修理の計画、実行、まとめを指導した。78年に帰国。

79年8月には日本 AA 企画のメキシコ・キューバの旅に出かけた。キューバは9月の非同盟諸国首脳会議に向けて準備の真最中だった。これが私と日本 AALA との最初の接点。このツアーで、今の連れ合いにも出会った。

79年10月からはバングラデシュへ。ここでの仕事は国連開発計画(UNDP)から受注した BCIC (Bangladesh Chemical

Industries Corporation)のプラントのリハビリテーションと従業員の教育、育成。私の講義を受けた従業員から「講義受講証明」を求められたことがあった。中東の石油プラントへの出稼ぎの際に利用するのだという。よい収入のためには自国の会社より中東への出稼ぎを選ぶという現実を突きつけられた。

私たち日本人エンジニア4人は、現地のお医者さん一家と交流し、楽しく過ごした。夫人はラーマン大統領に付いて、キューバで行われた非同盟諸国首脳会議に参加した人だった。成田への直行便が開設され第一便で多くのマスコミ関係者とともに1年後に帰国。ナイジェリアとバングラデシュでの生活は得難い体験だったと思う。

編集・発行

日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会

JAPAN ASIA AFRICA LATIN AMERICA  
SOLIDARITY COMMITTEE



住所 〒160-0022 東京都新宿区新宿 2-11-7 第33 宮庭ビル 4階

電話：03 (5363) 3470 HomePage <http://www.japan-aala.org/>

FAX：03 (3357) 6255 E-mail：info@japan-aala.org

振替 00110-6-72434 毎月1回1日発行1部150円(送料62円)